

呼称表現の研究からポライトネスの対照社会言語学的研究へ¹

山下 仁

0. はじめに

本稿の目的は、社会言語学の観点からの呼称表現研究とポライトネス研究を紹介し、日独対照研究の問題点を示すことにある。まず、1960年代からの呼称表現研究を取り上げ、どのような問題がテーマとなったかを示す。次に1970年以降の主要なポライトネス研究を概観し2005年以降の比較的新しい研究を取り上げる。最後に、日本語とドイツ語のポライトネスについて日本語を用いて対照研究をする場合の問題点を考察する。

1. 呼称表現研究

ここでは、おもに Ulrich Ammon(1972)の呼称表現の隠蔽作用について述べる。その前に、Roger Brown and Albert Gilman(1960)の呼称表現の研究を取り上げておきたい。

1.1. Roger Brown and Albert Gilman の研究 (以下 Brown&Gilman と略記)

1960年に発表された Brown&Gilman の研究は、呼称表現研究の代表的なものであり、後のポライトネス研究にも少なからぬ影響を及ぼした。彼らの議論は以下の通りである。

英語には二人称の人称代名詞として *you* しかないが、現代のヨーロッパの言語の多くには、現代のいわゆる親称と敬称の区別がある。ドイツ語では *du* と *Sie*、フランス語では *tu* と *vous*、イタリア語には *tu* と *voi* があり、スペイン語には *tu* と *usted* がある。英語にもかつては人称代名詞として *thou* と *ye* の区別があったが、そのうちの *thou* の方が、次第に使われなくなり、日常生活での言語使用からほとんど消え去って、*ye* が *you* にかわった。英語から見れば、他のヨーロッパの言語は複雑に感じられるが、ヨーロッパの言語の中でとらえてみると、二人称の人称代名詞を *you* しかもたない英語の方が、むしろ例外なのである。ともあれ、Brown&Gilman は、親称の方を **T**、敬称の方を **V** として表わし、その使用法の変遷を「力」と「連帯」という概念を用いて説明した。簡単にそれを再現するならば、かつての封建主義の時代における **T** と **V** の使用法は、非左右対称的であった。すなわち、君主や教師などの上位者は家来や生徒などの下位者に **T** を使っていたのに対して、下位者が上位者を呼ぶ場合、下位者は上位者に **V** を用いなければならなかった。つまり、その当時、上位者は下位者に対して社会的かつ心理的になんらかの「力」を持っていたが、呼称表現における **T** と **V** の非左右対称的使用には、その上位者と下位者の間の「力」関係が表われていた、というのである。それに対して、現代では上位者と下位者の間にあるのは社会的な「力」関係ではなく、比較的对等な「連帯」関係である。現代において、

¹本稿は、平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「敬語表現に関する日独対照社会言語学的考察」(課題番号: 18520310)による研究成果の一部である。

TとVが残されているドイツやフランスでも、上位者が下位者に呼びかけるときにも、下位者から上位者に呼びかけるときにも、同じく、互いに左右対称的なTもしくはVを用いるのが普通である。この左右対称的な呼称表現の使用は、使用者の相互的な「連帯」を表わしている、というのである。社会的な現実が「力」関係から「連帯」関係へと移行するのと同じように、呼称表現の使用も、「力」関係から「連帯」へと移行した、という論を展開したのであった。その後、英語圏では Susan Ervin-Tripp(1972)が、ダイアグラムを用いて呼称表現の使用法について記述したが、ドイツでは Ulrich Ammon(1972)が次節で示すような興味深い論を展開した。

1.2. Ammon による呼称表現の社会的機能の研究

1972年、Ulrich Ammon は、ドイツ言語学と文学のための雑誌に、ドイツ語の呼称表現に関する論文を書いた。Ammon は、まず話し手、聞き手、発話対象からなる Karl Bühler のオルガノンモデルを引き合いに出しながら、狭義の言語学が発話対象の「意味」を問題にするのに対して、呼称表現の「意味」が「話し手」と「聞き手」、そして両者の関係を表わすことから、それが語用論、もしくは狭義の社会言語学および心理言語学の研究対象であるという確認作業から議論している。

この論文で Ammon は、Brown&Gilman がイデオロギーのレベルと現実のレベルの差を考慮していない、と批判する。Brown&Gilman の論法に従うならば、かつての封建時代における非左右対称的な使用法であれ、現代における左右対称的な使用法であれ、封建時代であれば「力」、現代であれば「連帯」という話し手と聞き手の社会的関係が、呼称表現という言語表現の使用法に反映されている、ということになる。ところが、Ammon は、その考え方に異を唱える。確かに、現代ドイツ語の人称代名詞の使用は、現代では近いもの同士は du を、距離のあるもの同士は Sie という呼称表現を左右相称的に用いている。だが、現実の社会には、上位者と下位者の間には歴然とした上下関係が存在する。社長と部下、雇用者と被雇用者の間にある上下関係は、明白な事実なのである。それにもかかわらず、お互いに du もしくは Sie で呼び合う、左右相称的な T もしくは V の使用法は、その現実の上下関係を表わしていない。現実には上下関係があるにもかかわらず、同じ言語表現の使用は、むしろそのような上下関係がないかのように見せる。そのような意味で、その上下関係を隠蔽する社会的機能があるという。さらに、Brown&Gilman は、現代の「平等」や「連帯」を標榜するイデオロギーに取り込まれている、とも指摘する。

ここで興味深いのは、ひとつには、現実の社会における階層差、もしくは上下関係という人間関係の多様性と言語使用の結び付きを Ammon が指摘している点である。そして、もうひとつは、研究者である Brown&Gilman が時代精神、もしくは現代のイデオロギーに取り込まれている、という最後に触れた点である。Ammon が、日常生活で言語を使用している人々の言語による意識形成ばかりでなく、時代のイデオロギーに取り込まれた研究者の無意識的な態度を明らかにしている点に注意しておきたい。

2. ポライトネス研究

では、次に 1970 年以降のポライトネス研究を概観しておこう。Gino Eelen(2001) は、以下に挙げる 9 つの代表的なポライトネス研究をまとめている²。

2.1. Robin T. Lakoff

Robin T Lakoff は、ポライトネスを、“人間同士のやりとりで本質的に内在する葛藤と対立の可能性を最小限にすることによって、相互行為を促進するよう意図された個人間関係のシステム”と定義する。また、Grice の「協調の原理」が、一般的な、世間に見られる言語行動を視野に入れていないと批判する。Grice は、Quantity、Quality、Relation、Manner が常に最大であることが不可欠であり、人間は本来協力的で、コミュニケーションの際は最も効果的な情報を最大限に提供するものとしたが、Lakoff は、むしろ通常の会話では、言語化したこと以上のことを話し手が意図していたり聞き手が理解する場合も多く、Grice の原理の一般化は難しいとする。それらを踏まえた上で Lakoff は、相互の言語行為の基本的ルールを次の 3 つに集約した。①Don't impose (強要しない) ②Give options (選択肢を与える) ③Make A feel good, be friendly (相手の気分を良くし、親しみをもって接する)。このルールを守る上で必要な戦略として、①に対しては“Distance” (相手との間に距離を設ける)、②については“Deference” (相手の意見を尊重する)、③に対しては“Camaraderie” (仲間意識を持つ) が必要とした。

2.2. Penelope Brown and Stephen C. Levinson (以下、Brown&Levinson と略記)

「ポライトネス」の代名詞ともいえるこの研究は、多くの研究者に引用され、批判も多くなされている。彼らは一般社会の普遍的な人間の特性を表すために“Model Person”という概念を用い Model Person が抱く欲求をフェイスとし、それには他人によって自分の行為が邪魔されたくないというネガティブ・フェイスと、ある程度は他人に好意を持って近づきたいというポジティブ・フェイスという 2 つの側面があるとする。Brown&Levinson はポライトネスを、言語行為において話し手と聞き手の持つフェイスの欲求が脅かされた場合に、そのフェイス侵害を補償するものとしてとらえ、その際に必要な戦略を、大きく次の 3 つに分けている。

- i ポジティブ・ポライトネス：聞き手のポジティブ・フェイスの欲求に適う行為
- ii ネガティブ・ポライトネス：聞き手のネガティブ・フェイスの欲求に適う行為
- iii オフレコード・ポライトネス：明確な要求行為の回避

² 以下は Eelen(2001)の 2-20 のまとめであり、本研究科博士課程の戎谷梓のレポートを短縮したものである。レポートのオリジナルは <http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~yamasita/index.html> を参照。

そして、それぞれのポライトネスについて具体的なストラテジーを挙げているが、ここでは省略する。Brown&Levinson は、ポライトネスが“社会における対人関係の表現の普遍的な構成要素であり、社会生活と社会コミュニティの構築に必須であると主張する。

2.3. Geoffrey Leech

Grice の理論を応用した Leech はポライトネス理論を、その協調の原理と同じく“個人間におけるレトリック”の枠組みとして位置付けており、以下の6つの原則を提唱する。

① **Tact** (察し) 聞き手の負担を最小化し、利益を最大化する、② **Generosity** (寛大さ) 聞き手以外の人々の利益を最小化することで聞き手の利益を最大化する、③ **Approbation** (賞賛) 聞き手への非難を最小化して聞き手への賞賛を最大化する、④ **Modesty** (謙遜さ) 自賛を最小化して自己非難を最大化する、⑤ **Agreement** (同意) 不一致を最小化して自己と他者との間の同意を最大化する、⑥ **Sympathy** (調和) 対立を最小化して自己と他者との間の調和を最大化する。

さらに、求められるポライトネスの種類や量は、i 拮抗度“competitive” (要求や依頼など、発話内容に含まれる目標が社会の持つ目標と相対する場合)、ii 友好度“convivial” (申し出や感謝など、発話内容に含まれる目標が社会の持つ目標と一致する場合)、iii 協調度“collaborative” (検査や告知など、発話内容に含まれる目標が社会の目標に対して中立のものである場合)、iv 対立度“conflictive” (脅迫や非難など、発話内容に含まれる目標が社会の目標と対立する場合) の程度によって決定されるとする。

2.4. Yueguo Gu

西欧の face 概念の不備を中国の face 概念の観点から指摘したのが Yueguo Gu である。Gu はモラルに関する社会規範に焦点を当てており、Leech に依拠しつつも、それがモラルや倫理面に関する社会的特徴に触れていないと批判する。また Brown&Levinson のポライトネス理論に対して、フェイスの概念は心理的な側面ばかりではなく、社会規範の側面から捉えるべきであると指摘する。

これらを踏まえ、Gu は以下の4つの原則を提示した。① **Self-denigration** (へりくだり) : 話し手が自己を卑下し、相手を高める、② **Address** (適切な話し方) : 聞き手の社会的立場を参照し、適切な呼称で話す、③ **Tact** (察し) : 聞き手の負担を最小化し、利益を最大化する、④ **Generosity** (寛大さ) : 聞き手以外の人々の利益を最小化することを述べることによって聞き手の利益を最大化する

Gu のポライトネス理論にはバランスの原則を含むという説明がされている。

2.5. Sachiko Ide

Gu と同様、西欧の face 概念の不備を指摘し、それを日本の「わきまえ」という観点から検討し、日本でポライトネスの研究を行ったのが Sachiko Ide である。Ide は、滑らか

で摩擦のないコミュニケーションの維持を念頭に置いており、Brown&Levinson, Leech, Lakoff の理論に対して批判的な見解も述べている。Ide は、“Volition (意志力)”と“Discernment (わきまえ)”の概念を導入し、Discernment が日本語における敬語表現の運用の基盤となっているとした。Ide は、conventional rules として以下の4つにまとめている。①社会的に高い地位の人に polite であれ、②power のある人に polite であれ、③年配の人に polite であれ、④フォーマルな場面（参加者が誰であるか）で polite であれ。

2.6. Shoshana Blum-Kulka

Shoshana Blum-Kulka は、イスラエルの観点からポライトネスがいかに文化に依存するかを指摘する。「文化的規範」と「文化的スクリプト（その文化内での決め事）」の二つのタームを用い、フェイスの欲求が文化的に規範付けられた特定の形態であって、決して普遍的なものではないと主張し、Brown&Levinson に対して批判的な見解を述べている。

ポライトネスは、文化全体の期待により決定される規範に基づく適切な振る舞いとして位置付けられ、以下の4つのパラメーターにより影響を与えられる。①social motivations (社会的動機)：ポライトネスの機能性（人がポライトである理由）、②expressive modes (表現方法)：ポライトネスのために用いられる異なる言語形態、③social differentials (社会的差異)：ポライトネスにおいて状況アセスメントを行う、④social meanings (社会的意味)：特定の状況コンテキストにおける特定の言語表現

そして、これら4つのパラメーターが相互に関係し合い、文化的なフィルターにかかることにより、文化ごとにポライトネスが体系化されると指摘する。

2.7. Bruce Fraser and William Nolen (以下、Fraser&Nolen と略記)

Fraser&Nolen は、ポライトネスを“conversational-contract (会話における契約)”という観点から研究する。彼らによれば、会話の参加者は、与えられた会話に参加する上で、互いが期待するものを決定する「権利」と「義務」をセットで持ち合わせている必要がある、としている。その双方の間でなされる個人間の契約は、静的なものではなく、再交渉やコンテキストの変化によって随時見直しが行われるものでもある。

会話的契約における権利と義務は、会話的／制度的／状況／歴史的側面から構築され、その4つの側面は交渉の内容により変化し得るといふ。

Fraser&Nolen によれば、そのときどきの条件に基づいて会話上の契約は行われ、会話における契約が“通常の”相互行為においてなされる場合、ポライトネスは認知されないが、インポライトであった場合はそれが顕在化すると指摘する。よってポライトネスは方略的な相互行為でも、聞き手の気分を良くするためのものでもなく、本来備わっているものでもないという見解に達している。彼らはまた、ポライトネスの形態を左右するのは聞き手の側であるとし、話し手の側がいくらポライト／インポライトな振る舞いをして、聞き手の側がそれを受け止めない限りそれは成立しないことを条件として付け加えている。

2.8. Horst Arndt and Richard Janney (以下、Arndt&Janney と略記)

Arndt&Janney は、「適切性」という判断基準の持つ規範性を問題にし、話者本人である人々に注意を向けてポライトネスを個人間の枠組みで捉える。

その枠組みの中で“emotive communication”という概念を挙げている。これは、他者の行動に影響を与えるため、情緒的なシグナルを意識的、または方略的に修正していくものである。彼らはこれを、自然発生的で、感情に基づくコントロールできない表現を含む emotional communication とは区別し、発話内容だけでなくパラ言語的／非言語的シグナルを含む emotive communication を特異なものとしている。emotive communication は、confidence (確信)、positive-negative affect (ポジティブ・ネガティブな情動)、そして intensity (度合い) という要素をもつという。話し手は言葉や音声、身振りを選択して用いて、自分自身の話していることの信頼性を示し、情緒的に働きかけ、また表現方法や声のトーンなどを変える。これらの側面の説明を踏まえて、Arndt&Janney は、ポライトネスを emotive communication において個人間で協力的に振舞うことであるとした。そしてその目的は、社会の期待に沿うことを目指すことではなく個人間的に協力的な方法でメッセージを伝えることにより、個人間の対立を避けようとする点も指摘する。

2.9. Richard Watts

ポライトネスの概念を Politic behavior と結びつけ、研究したのが Richard Watts である。Watts によれば、Politic behavior とは、“equilibrium の状態で社会グループにおける個人間の関係を構築又は維持することを目的とする、社会文化的に決定された振る舞いである”とされている (Watts 1989:135)。その際“equilibrium”は社会的同等性を表すのではなく、社会の現状が保たれていることを示している。

Watts は社会におけるグループを二つに分けており、一方を、個人ではなくグループ全体に目を向けやすい性質を持つ、closed communication による社会的グループ (closed group)、もう一方をグループ全体ではなく個人に目を向けやすい性質を持つ、open communication による社会的グループ (open group) とした。Politic behavior は open/closed どちらのグループにも現れるものであり、Politeness は個人に目を向けやすい open group にのみ現れるとして、Politeness は Politic behavior の中の一つの現象であるとしている。

Eelen(2001)は、これらの研究を紹介した後に、これらの研究が、一次的ポライトネスと二次的ポライトネスを区別しているかどうか、ポライトネスにインポライトネスも含めているかどうか、そして、聞き手を中心とする視点をとりいれているかどうかなどについて議論している。

3. 2005年以降のポライトネス研究

では、次に Eelen 以降のポライトネス研究を見てみたい。様々な既存の雑誌が特集をくんでいるが、ここでは、2005年に刊行された雑誌 *Journal of Politeness Research* から、いくつかの比較的新しい研究を取り上げよう。

3.1. Marina Terkourafi

Marina Terkourafi(2005)は、これまでのポライトネスの研究を大きく二つに分け、新たな研究方法を提案した。彼女が二分した研究の一方は、Grice の協調の原理やオースチンやサールらの発話行為理論の前提にもとづくもので、Lakoff(1973)、Leech(1983)、そして Brown&Levinson(1987)などの「伝統的」な視点からの研究であり、もう一方は「ポスト・モダン」の視点からの研究である。こちらは、発話行為理論などの理論的前提を度外視し、学問上の概念としての（二次的）ポライトネスではなく、一般的な参加者が理解するところの（一次的）ポライトネスに焦点を定め、語や文のレベルではなく、談話のレベルでのポライトネスをとらえるという特徴をもつ。そして、この中には、Eelen(2001)、Mills(2003)、Watts(2003)等の研究が含まれるという。このように区別したうえで、どちらの視点の研究も、理論に方向づけられており、語用論の枠組みで分析をおこなうという前提に従いつつ、ミクロのレベルでのポライトネスを研究したものであると指摘する。Terkourafi(2005)自身は、それらの問題点を踏まえ、ミクロレベルを越え、量的な調査方法を用いた frame に基づく視点からの研究を目指す、と述べている。

ここでは、その詳細には触れる余裕はないが、この論文では、Terkourafi 自身の研究よりも、むしろ Eelen(2001)の影響力の強さが鮮明になっている。つまり、Terkourafi がポスト・モダンの視点からの研究の特徴を記述する際に用いているキーワード、すなわち、一次的ポライトネスと二次的ポライトネス、ポライトネスとインポライトネス、あるいは規範や規則に対する批判的な態度などは、すべて Eelen(2001)の中で議論されていた概念だからである。

3.2. Geoffrey Leech

Terkourafi が「伝統的」とした Geoffrey Leech も、この新しい雑誌に新たな論文を掲載している。Leech(2007)もまた Eelen(2001)を参照しているとはいえ、「ポライトネスに西と東の区別があるのか」、という独自の問題意識について、ポライトネスのグランド・ストラテジーという構想を立て、はっきりと「否、そのような区別はない」という論を展開する。そのストラテジーというのは、(A)他者の要求に高い価値を付す、(B)自分の要求に低い価値を付す、(C)他者の品質に高い価値を付す、(D)自分の品質に低い価値を付す、(E)他者の義務に高い価値を付す、(F)自分の義務に低い価値を付す、(G)他者の意見に高い価値を付す、(H)自分の意見に低い価値を付す、(I)他者の感情に高い価値を付す、(J)自分の感情に低い価値を付す、というものである。おそらく、ホンネとしては、自分を高め、他

者を低めたいのだけれども、タテマエとしては、他者を高め、自分を低めておく、という戦略が、たしかに普遍的なのかもしれないと思うのだが、無論、Leech は「ホンネ」と「タテマエ」の差には言及していない。理論や原理のようなものを想定し、それにぴったりと当てはまる例を挙げて、明確にその議論の正しさを提示するのが学問である、という立場に立つのであれば、Leech のような議論は明快であり、精神衛生上も極めて爽快であるに違いない。しかしながら、人間関係はタテマエだけではうまくいかないことがある。どうしても、ホンネがでてくる具体的な場面においては、上のような戦略では分析できなくなるケースが容易に想像することができる。貸したお金を返してくれず、踏み倒そうとしている友人に対して、人はいつまでも、(A)他者の要求に高い価値を付す、などとは言ってられない。それはともかく、Leech はこの論文を書いた 2007 年の段階でも、先に述べた Brown&Gilman の議論を援用し、「力」と「連帯」もしくは「非左右相称」などの概念を用いているのが印象的であった。

3.3. Robin T. Lakoff

Eelen が「現代のポライトネス研究の母」と呼んでいた Robin T. Lakoff も、この雑誌に投稿しており、アメリカの政治家が用いる丁寧さ、とくに Niceness の問題を、その歴史の変遷やジェンダーの問題とも結びつけながら、公的な場と私的な場という概念装置を用いて議論している。これはエッセイ風の論文であり、内容は、レーガンやクリントンやブッシュが Nice であったという陳腐なものである。たとえば、ゴアとブッシュを並べて、「ゴアは、フォーマルな標準英語を話した、ゴアは明晰で、文法的に正確な文をきちんと話した。ところが、ブッシュはそうではなかった。ところが、それがプラスに評価された (181)」、といった評価が記されている。が、2008 年の段階で、演説がうまく、明晰な英語を話すバラク・オバマが、黒人として初めてアメリカの大統領になったという歴史的出来事を通して現時点からみると、やはり時代に依存した描写に見える。また、政治以外の議論としては、Martha Stewart の事件と Niceness の関連を取り上げている。

次に、Terkourafi が「ポスト・モダン」の視点からの研究であるとした、Sara Mills と Richard Watts を取り上げよう。

3.4. Sara Mills

Sara Mills は、2003 年に Gender and Politeness という単著を出し、それはすぐに「言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとはなにか」というタイトルで和訳された。その Mills が 2005 年、“Gender and impoliteness” という論文を発表している。ここでも単著と同様、Eelen を引き合いに出し、以下のように述べている。かつてのフェミニストの研究においては、女性が「力の弱い」話し方をする、たとえば付加疑問、敬意表現、モダリティ、躊躇などのためらいがちな言語表現をもちいる、ということがしばしば想定されていた (Lakoff 1975)。多くのフェミニストにとって、このようなタイプの言語表現をす

すべての女性が使うわけではないということは明らかであったのだが、白人の中流階級の女性の言語行為が手本になって、そのような女性の言語のステレオタイプが作られてきた。そして、ある女性が、そのようなステレオタイプとは異なる、直接的で、自立した、力強い（パワフルな）言語表現をもちいると、「丁寧でない」もしくは「攻撃的」だと判断される。そうした判断がどのようになされるのかを考察する際、ジェンダーが有意なファクターになっていることをとらえることは重要だ、と述べている。つまり、単純に、ポライトネスの逆にあるインポライトネスという観点での議論ではなく、ジェンダーとポライトネスの間にあるステレオタイプの延長線上にある問題としてインポライトネスの現象をとらえているところが面白い。

3.5. Richard Watts

2001年に Gino Eelen の本を読んで自信を得た Richard Watts も 2003年に、*Politeness* という本を出版している。Watts は Ide や Ehlich とともに 1992年の段階で、*first-order politeness*（一次的ポライトネス）と *second-order politeness*（二次的ポライトネス）という区別を提唱したが、はたしてそれが正しいのかどうか判断できなかったという。ところが、Eelen の「ポライトネス理論に対する批判」という本を読んで、その有用性に確信をもつことができたという。その後 2002年には、早くも共同作業が実現し、Eelen が中心になり、Jim O'Driscoll と協力して Ghent 大学で第 14 回の社会言語学シンポジウムが開かれた際に、ポライトネス研究におけるディスコース・アプローチというコロキウムを組織した。そのような機会を通して、Watts の 2003年の本が出版されたのだという。そして、その後も、Watts はポライトネス研究に打ち込み、2008年に“*Rudeness, conceptual blending theory and relational work*” という論文を掲載している。ここで、Watts は、*impoliteness* という用語よりも、日常生活では *rudeness* という語がよくつかわれるためディスコース・アプローチによってこの *rudeness* をとりあげているのだが、ここでは、認知言語学のメンタルスペースを用いており、ややわかりにくいと思った。しかも、この論文には、CDA の Wodak や van Dijk などの論が引かれており、広げすぎなのではないかと思った。とはいえ、1999年に記した 18 世紀における英語の標準語化とポライトネスの関係性を扱った歴史社会言語学の観点からの論文は評価に値すると思われる。

この雑誌の寄稿者としては、他にも“*Culturally speaking, managing rapport through talk across cultures*”(2000)を書いた Helen Spencer-Oatey や、“*Power and Politeness in Action, Disagreements in Oral Communication*”(2004)を書いた Miriam A. Locher なども挙げられるが、ここでは紙数の関係でそれらについては残念ながら紹介できない。

3.6. Manfred Kienpointner

最後に、Manfred Kienpointner の *Impoliteness and emotional arguments* という論文について触れておきたい。

「感情」というファクターは、ポライトネス、特にインポライトネスに深くかかわる。これは、シュッツ風に言うならば、「一般的な成人の自然な態度における、純粋な所与の経験」のひとつであろう。つまり、生活世界において、「感情」と「ポライトネス」との間には何らかの関係がある。ところが、これまでのポライトネスの研究において、この「感情」という問題を積極的に取り上げたものは少ない。そこで、この「感情」の果たす役割について考えてみよう、というのがこの論文の趣旨なのである。むろん、ポジティブな感情というものもあり、夫婦げんかのように丁寧な口調で否定的な感情を表わすこともあるが、ここでは、感情的論証の危険なタイプ、つまり「破壊的」な感情的論証を取り扱っている。

しかし、この論文で重要と思われるのは、このように「感情」や「インポライトネス」といった、これまであまり扱われていないテーマを扱っているばかりではなく、具体的な談話例として、ヨーロッパで特に有名な極右派政党であったオーストリア自由党の党首(2001年当時) ヨルク・ハイダー、フランスの国民戦線の党首ジャン＝マリー・ル・ペンのインタビューを取り上げている点である。もちろん、Kienpointner は他の例もあげているので、強調することはできないが、これらの政治家の発言を「相手の感情を害するインポライトネス」の例として挙げ、それを批判的に取り上げることによって、その政治的な問題に意識を向けさせているとも言える。上記の Leech や Rakoff の議論に比べると、このようなポライトネス研究は、異質であるのかもしれない。つまり、あたかも CDA のように、ポライトネスの問題が、社会的な問題、もしくは政治的な問題と密接に関連していることを示しているのである。

4. ポライトネス研究の問題点

以下では、上記のこれまでの研究を参考にしつつ、日本語とドイツ語でポライトネスに関する対照研究を行う場合に生じるいくつかの問題を箇条書きにして挙げておこう。

まず、「ポライトネス」という用語の問題が挙げられる。「ポライトネス」という語は、英語の *politeness* をそのままカタカナで記述したものであるが、これが日本語としてどれだけ定着しているのかは不明である。たしかに、研究者の間では暗黙の了解として、敬語研究とは異なることを示すためだと思われるが、この用語を用いているが、なぜ、これまでに、「敬意表現」や「待遇表現」などのように訳さなかったのかは不明である。ともあれ、それに付随する以下のような問題が存在する。

ポライトネス概念の内容の問題として。

- ・ポライトネスと敬語は違うのか
- ・ポライトネスとは静的なものか、動的なものか
- ・一次ポライトネスか二次ポライトネスか、あるいはそのような区別は不要か
- ・ポライトネスにはインポライトネスも含まれるのか
- ・ポライトネスには「親しみ」や「距離」などの他の評価概念も含まれるのか（もし

含まれるとしたら、ポライトネス同様、距離や親しみはどうやって測るのか)

- ・ポライトネスは心理的なものなのか、社会的なものなのか
- ・face というのは、心理的なものなのか、社会的なものなのか
- ・日常生活の相互行為において重要なのはポライトネスだけなのか
- ・ポライトネスとは、普遍的なものなのか、それぞれの文化に依存するものなのか
- ・ポライトネスとは話し手の問題なのか聞き手の問題なのか
- ・ポライトネスとは、「配慮」の問題なのか「評価」の問題なのか

ポライトネス研究の対象に関する問題としては、以下のようなものが挙げられる。

- ・語の問題なのか
- ・文（言語使用）の問題なのか
- ・テキストの問題なのか
- ・談話の問題なのか
- ・非言語行動を含む問題なのか
- ・表現の構造の問題なのか、それを用いる際のストラテジーの問題なのか
- ・人間関係の問題なのか、表現もしくは内容の問題なのか
- ・文化や社会の問題なのか、個別的な相互行為の問題なのか
- ・理論の問題なのか、現象の問題なのか
- ・標準語に限定した問題なのか、方言なども含めるのか
- ・イデオロギーの問題なのか、それとも、そういう問題は関係ないのか
- ・ある言語に限定した問題なのか、二言語（以上）の問題なのか
- ・たんなる方法論の問題なのか、目的の問題なのか

最後に、もしもたんなる方法論の問題ではなく、ポライトネス研究に目的があるとするならば、それに付随して、以下のような問題が挙げられる。

- ・ポライトネス研究のための研究なのか、研究そのものが目的なのか
- ・語用論、もしくは社会言語学のための研究なのか
- ・なんらかの社会的な問題解決のための研究なのか

言うまでもなく、ここでこれらの問題について取り上げる余裕はない。しかし、日本語でポライトネスについて社会言語学の観点からとらえようとするならば、これらの問題群のうち、少なくとも、関連するものについては明らかにしておくべきであろう。

本稿ではそれが明らかにはなっていないけれども、その延長線上にある研究は、批判的社会言語学の枠組みにおいて、日本語とドイツ語のコミュニケーションの差異をポライトネスという観点からとらえることで、よりよい相互理解に貢献できればと思っている。

<主要参考文献>

- Ammon, Ulrich (1972) „Zur sozialen Funktion der pronominalen Anrede“, in *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 7, 73-88.
- Brown, Roger W. and Albert Gilman (1960/1990) "The Pronouns of Power and Solidarity", in P. P. Giglioli (ed.), *Language and Social Context*, Penguin Books, 252-282.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness – Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, Gino (1999) "Politeness and ideology: A critical review", in Kienpointner, M.(ed.) *Special Issue on Ideologies of Politeness, Pragmatics*, vol.9, No.1, 163-173.
- Eelen, Gino (2001) *A Critique of Politeness Theories*, Manchester: St. Jerome Publishing.
- Ervin-Tripp, Susan (1972) "On sociolinguistic rules: alternation and co-occurrence", in *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, Gumperz, J.J./Hymes, D. (eds.), New York etc.: Holt, Rinehart and Winston, 213-250.
- Kienpointner, Manfred (2008) "Impoliteness and emotional arguments", in *Journal of Politeness Research* 4, 243-265.
- Lakoff, Robin Tolmach (1973) "The logic of politeness: or, minding your p's and q's", in *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 292-305.
- Lakoff, Robin Tolmach (2005) "The politics of Nice", in *Journal of Politeness Research* 1, 173-191.
- Leech, Geoffrey (1983) *Principle of Pragmatics*, London: Longman.
- Leech, Geoffrey (2007) "Politeness: Is there an East-West divide?", in *Journal of Politeness Research* 3, 167-206.
- Locher, Miriam A. and Richard J. Watts (2005) "Politeness theory and relational work", in *Journal of Politeness Research* 1, 9-33.
- Marui, Ichiro/ Rudolf Reinelt/Yoshinori Nishijima/Kayoko Noro/Hitoshi Yamashita (1996) "Concepts of communicative virtues (CCV) in Japanese and German", in Hellinger, M./Ammon, U. (eds.) *Contrastive Sociolinguistics*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter, 385-409.
- Mills, Sara (2005) *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press. (熊谷滋子訳 (2006) 言語学とジェンダー論への問い 明石書店)
- Mills, Sara (2005) "Gender and impoliteness", in *Journal of Politeness Research* 1, 263-280.
- Spencer-Oatey, Helen (2005) "(Im)Politeness, Face and Perceptions of Rapport:

- Unpackaging their Bases and Interrelationships”, in *Journal of Politeness Research* 1, 95-119.
- Terkourafi, Marina (2005) “Beyond the micro-level in politeness research”, in *Journal of Politeness Research* 1, 237-262.
- Watts, Richard (1999) "Language and politeness in early eighteenth century Britain", in Kienpointner, M.(ed.) *Special Issue on Ideologies of Politeness, Pragmatics*, vol.9, No.1, 5-20.
- Watts, Richard (2003) *Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Watts, Richard (2008) “Rudness, conceptual blending theory and relational work”, in *Journal of Politeness Research* 4, 289-317.
- Watzlawick, P. / Beavin, J. H. / Jackson, D. D. (1972): *Menschliche Kommunikation. Formen, Störungen, Paradoxien*. Bern, Stuttgart, Toronto: Verlag Hans Huber.
- Yamashita, Hitoshi (1992): "Vom Sie zum Du? - eine empirische Erhebung zu Funktion und Gebrauch der deutschen Anredeformen", in *ENERGEIA*, Nr.18: 76-108.
- Yamashita, Hitoshi (1993): "Hörerspezifische Höflichkeitsformen", Herder Institut (Hrsg.) *Deutsch als Fremdsprache* 30Jg. Heft 3, 145-151.
- Yamashita, Hitoshi (2001): „Höflichkeitsstile im Deutschen und Japanischen“, in Heinz-Helmut Lüger (Hrsg.) *Höflichkeitsstile CCC-Sammelband*, 315-334.
- Yamashita, Hitoshi (2002): „Verkaufsgespräche im Deutschen und Japanischen“, in Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hrsg.) *DoitsuBungaku* Vol.108. 82-92.
- Yamashita, Hitoshi/ Kayoko Noro (2004) “Kommunikative Kompetenz - Sprachliche Kompetenz“, in Ammon, U./ Dittmar, N./ Mattheier, K. J. /Trudgil P. (Hrsgs.) *Sociolinguistics/Soziolinguistik, An International Handbook of the Science of Language and Society/Ein internationales Handbuch zur Wissenschaft von Sprache und Gesellschaft* (second edition), 165-171.
- 山下仁(2000)『日独言語行動の対照社会言語学的考察』文部省科学研究費補助金基盤研究(C)一般(2) 研究成果報告書
- 山下 仁(2001a)「敬語研究におけるイデオロギー批判」野呂香代子・山下 仁(編)『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』, 三元社、51-83.
- 山下 仁(2001b)「コミュニケーション能力とドイツ語教育」『言語文化共同研究プロジェクト 2000 : 「文化」の解説/ドイツ語教育の諸相』 83-96.
- 山下 仁(2005)『言語行動と伝達能力に関する対照社会言語学的考察』科学研究費補助金基盤研究(C)一般(2) 研究成果報告書
- 山下 仁(2006)「ポライトネス研究における自明性の破壊にむけて」ましこ・ひでのり編著『ことば/権力/差別』三元社、165-191.
- 山下 仁 (2007)「グローバリゼーションと敬語研究」『ことばと社会』10号、136-158.